

天声人語

1914年6月、サラエボでの暗殺事件が起きた時には、それが世界を巻き込む大戦につながるとは誰も予想しなかった。

多くの国家指導者が戦争を避けたいと考え、たとえ衝突が起きたとしても短期間で終わると信じていた▼第1次世界大戦を詳細に記録した『八月の砲声』（バーバラ・タックマン著）は、中

心人物の一人だったドイツ皇帝をこう描く。「国際的、開放的でかつ気の小さかったカイゼル（皇帝）は、けつして全面戦争を望んではいなかつた」▼皇帝は、

ドイツが国際政治の舞台でいつそう大きな権力を振るうことを求めていた。しかし彼はそれを「戦争にはよらずに威嚇してかち得たいと願つた」。指導者たちの誤算と過信の末に起きた戦争は教訓に満ちている▼いま思い起こすのも決して大げさではない。そう感じるのは、伊朗とにらみあうトランプ政権が誤算を重ねてているように見えるからだ。核合意を投げ出し、制裁を加えて威嚇したが、伊朗は屈服するどころか敵対姿勢を強めた

▼そこに今回の司令官殺害である。伊朗の指導者と民衆からの猛反発を一体どこまで計算していたのだろうか。「戦争を始めるためでなく、止めるための行動だ」とのトランプ大統領の発言は、言い訳にしか聞こえない▼『八月の砲声』は62年のキューバ危機のさなか、ケネディ米大統領が参照した書でもある。ソ連との戦争を回避すべく努め、第3次世界大戦の芽をつんだ。戦争の種をまいた愚かさを打ち消すための行動がいる。